野鳥・Tokyo

数字の魔力

行徳野鳥観察舎　蓮尾純子

私は典型的な「右脳型人間」で、自分では理性のカケラもないと自負しています。どんなに言って聞かせられても、心で、感情で納得していないとまったく頭に入らないのです。大学では数学と物理を落として留年しましたし、今でも法律上の内容とか、取扱説明書のたぐいはどうがんばっても理解できないと、ナサケナイことなのですが諦めています。

それにもかかわらず、高校生の時に新浜カウントグループ（現在は「新浜倶楽部」）で叩きこまれた鳥のカウントについては、いまだに現役で続けており、しかもその「数字であらわされた実態」の面白さには飽きることがありません。

面白かったことのひとつが、『ユリカモメ』に毎月掲載される月例探鳥会での記録された鳥の概数です。探鳥会に参加された方にとっては、こんなにいい加減なシロモノはないと感じられることが多いのではないかと思います。「１羽しか見てない」これはよいとして、「10羽までは行かなかったよね。５羽くらいかな」「うーん、数えきれないから1000羽、いや、2000羽にしておこうか」という感じではないでしょうか。そんなの記録か！　とお怒りになる方もおられるかもしれません。ところがどっこい、もう７、８年前ですが、1995年から７年経過した三番瀬関係の月例探鳥会の記録をまとめて『ユリカモメ』に掲載していただいたことがあります。ただ鳥の種類を列挙しただけの記録でも、それなりの価値はあるのですが、それに概数であるにせよ、数字が入っただけで、なんといろいろなことが見えることか。飛躍的な情報量アップです。何しろ、パソコン処理ができるのですから。

たとえば、どなたかチュウサギの記録を拾ってみませんか？　一時激減したあと回復し、千葉県では40年前と同様にいちばん多いシラサギになっているはずです。一方、コサギに関しては逆に減少が著しいのですが、まあ15年の記録では短すぎて傾向が見えないかも知れませんし、千葉と東京では事情が異なるかもしれませんけれど。

もうひとつ、私は「下手な鉄砲も数撃ちゃ当たる」主義です。年に１回、識別に長けたプロが実施したカウントと、月１回、まだヒバリとホオジロの識別に自信が持てない程度の初心者＋αのバードウォッチャーが行ったカウントであれば、月１回のほうが役に立つ場合がけっこうある、と思っています。さらに、鳥のカウントについては、「上ふたケタ」の数値に自信が持てるというのが精度としてはほぼ最高ではないかと思っています。まだ学生だったころの大昔、岸からせいぜい100ｍほどのところの水面で休息していたスズガモの群れを10回数えて、たしか119羽から124羽うち５回は122羽でこれが正確な数らしいという結果を出した時からの確たる信念です。そんなもの、なんです。

それでも数字の魔力には、左脳型であれ、右脳型であれ、どんなタイプの人間も弱いものだと思います。カウントであれ、目下私が取り組んでいるカワウの繁殖成功率であれ、なんらかの形で調査にかかわり、数字で結果を出してゆくこと、これって、実に面白いものなのです。みなさまもいかがでしょうか。